

家庭内性役割認識尺度の構成と妥当性の検討

大井修三¹⁾・今枝未紗²⁾

¹⁾岐阜女子大学 ²⁾名古屋市

(2018年11月19日受理)

Construction of Domestic Gender Role Scale and the Validity

¹⁾Gifu Women's University ²⁾Nagoya City

OHI Shuzo¹⁾, IMAEDA Misa²⁾

(Received November 19, 2018)

Summary

In masculinity and femininity of BSRI (Bem Sex Role Inventory), any sex differences were not shown. On the other hand, we feel to be expected a behavior matched with the sex in private episode. It was speculated that this conflict was caused by means of the scale used to measure the sex roles. BSRI may be constructed as a gender scale measured in the public society. If so, to measure our usual feeling of gender role, we should construct a scale measuring gender recognition in a private life. We constructed a gender scale based of domestic activities. This scale was consisted of 3 subscales, feminine, masculine and kids behaviors, 5 items in each. The results of 3 subscales showed that in both sex of respondents, the results of each subscale corresponded to the sexes at the high rate, indicating that this scale was valid to measure domestic gender roles.

キーワード：家庭内性役割，女性性・男性性・幼児性別役割，性役割認識尺度

Key words: domestic gender role, femininity/ masculinity/ infant gender, gender scale

現代のストレスの多い社会において適応的に生活をするためには、ストレスフルな出来事に遭遇したときに、適切にストレス対処行動をとる能力を持つことが重要となる。ストレス対処行動は、ストレスフルと認知した出来事に対して、それを軽減・克服するための認知的・行動的努力である（ラザルス・フォルクマン, 1984）。このような努力には、ス

トレスフルと認知したことに対して、解決的に取り組む「問題中心の対処」、情動調整を行う「情動中心の対処」、その事態から遠ざかり、関係のないことをする「回避中心の対処」の3種類が指摘されてきた。

これまでの研究では、これらの対処行動の使用頻度には性差があることが報告されてきた（e.g. 金・小川, 1997）。このストレス対処

行動の性差は、個人の生物学的性別によるのではなく、性別に付随して社会から期待される性役割に影響を受けているのではないかとして、金・小川(1999)、早瀬(2008)は、性役割とストレス対処行動との関係を明らかにしようとした。しかし、それらの研究においては、ストレス対処行動の頻度に性差があるにも関わらず、性役割測定値には性差が明確に見出されず、ストレス対処行動の性差が、性役割認識によることを明確に示す結果は示されなかった。

ストレス対処行動には性差があるにも関わらず、性役割でそれが説明されてこなかった原因には、それらの研究で性役割認識を測定するのに用いられたBSRI(Bem Sex Role Inventory: ベム性役割目録, 安達・上地・浅川, 1985)にあるのではないかと考えられる。このBSRIで取り上げられた性役割行動の項目の特徴として、男性または女性にふさわしいというよりも、人としてふさわしいとされる性格特性で構成されていることが挙げられる。

遠藤・橋本(1998)や児玉・杉本・松田(2002)の研究では、これまで男性や女性に望ましいとされてきた性格特性は、現代の男女平等の風潮の中で、性別に応じて区別されるものではなくってきていることが指摘された。このことは、これまで性役割を測定するのに用いられてきた尺度が、現代に存在する性役割期待を明確に反映できていないのではないかという疑念を生じさせた(大井・今枝, 2017)。

一方で、私たちは日常生活の中で、男女の行動や役割の認識に違いを感じる場面に遭遇する。宇井(2003)は、学校や職場といった、性別に応じた役割や行動が明確に求められることが少なく、性別に応じて区別されない場所を「公的領域」と捉えた。そして、家庭を

「私的領域」と捉え、そのような場面では、男女の特性に応じた役割や行動が明瞭に認められることを報告した。また、山田(2002)も、伝統的な役割分業が残る家庭が多く、家庭は性役割の伝達の間であることを指摘した。これらの研究は、家庭という私的領域では性役割が顕著に存在していることを示唆するものであった。そこで本研究では、これらの先行研究を踏まえて、性役割の認識とストレス対処行動との関連を検討するために、家庭内における性役割を測定することが必要であると考えた。

しかし、家庭内という私的な場面における性役割の認識を測定する尺度は、これまでの研究では開発されてこなかった。そこで、本研究では、性役割行動が根強く残っていると考えられる家庭において、父・母や兄弟・姉妹がどのような行動を行っているかに基づいて家庭内の性役割行動を測定する尺度を構成することとした。そのために、家庭内においてそれぞれの構成メンバーが行っている行動の項目を収集するために、研究1では予備調査を行って家庭内性役割行動の項目を収集した。研究2では予備調査で得られた項目に基づいて質問紙調査を行い、その結果に基づいて家庭内性役割尺度を構成した。

研究1 予備調査：家庭内における性役割行動項目の収集

山田(2002)や宇井(2003)が指摘したように家庭を私的領域とし、そこで何気なく行われている伝統的な性役割行動に基づいて、家庭内性役割尺度を作成することが本研究の目的である。そのために研究1では、日常の家庭内で家族の各成員が行っている行動項目を収集することを目的とした。

方 法

〈調査協力者〉

調査協力者は、調査対象者募集の呼びかけに自発的に申し出てくれた大学生14名で、男性7名、女性7名であった。平均年齢22.07歳であった。

〈調査方法と調査内容〉

この情報を収集するために、半構造化面接法を用いた。質問の内容をあらかじめ設定しておき、それに基づいて調査協力者に個別に面接を行った。面接時間はおよそ15分であった。質問の内容は、性別、年齢、家族構成、父親と母親の行動・役割、父親と母親のイメージ、被験者本人の家での行動・役割、兄弟や姉妹の行動・役割を尋ねるものであった。

結果と考察

収集された家庭で行われる行動を、父親・

母親の行動を中心に整理し、46項目にまとめた。また、それらの項目を教員1名、心理学を専攻する大学院生2名、学部学生3名で、それらの行動が一般的に家庭で行われる行動かどうかや、表現が適切かどうかを検討した。その際、家庭においては、現在だけでなく、幼児期の遊びにも性差があることが議論された。出口・柴田・佐藤(1991)は、幼児の生活行動の性差を扱った研究において子どもの遊びを調査し、性別に応じて特有な遊びがあることを報告した。その中で、女兒に特有の遊びでは、「おままごと遊び」と「人形遊び」であるとされたが、男児については具体的に報告されていなかった。そこで、山口らの研究を参考に「おままごと遊び」と「人形遊び」を加え、そのほかに、上記の教員・学生と検討し、「虫を飼う」「電車やミニ四駆のおもちゃで遊ぶ」「なわとびであそぶ」という項目を

表 1 聞き取り調査によって集められた家族によって行われる行動目録

項目内容	項目内容
1 町内会の役をする	27 農作業をする
2 訪問者にお茶を出す	28 人形遊びをする
3 家族の健康管理をする	29 食事の後片付けをする
4 おままごとをする	30 庭の草木の手入れをする
5 祖父母の介護をする	31 昼寝をする
6 冠婚葬祭や祭祀をとり仕切る	32 重い荷物を運んだり、移動したりする
7 花を育てる	33 玄関や部屋の掃除をする
8 トイレの掃除をする	34 家族の悩みや話を聞く
9 家系を守るために家を継ぐ	35 電球の交換等、高い場所で作業をする
10 お金を稼ぐ	36 縄跳びであそぶ
11 大切なことの最終判断をする	37 パートの仕事に行く
12 子どもの身支度をする	38 日用品の買い物に行く
13 外食時の精算をする	39 家族を車で送迎する
14 戸締りをする	40 ゴミ捨てに行く
15 車や機械のメンテナンスをする	41 布団を干す
16 身なりや身の回りに気を遣う	42 庭の草むしりをする
17 お金の管理をする	43 虫や害虫の退治をする
18 動物の世話をする	44 お弁当を作る
19 ミニ四駆や電車のおもちゃで遊ぶ	45 家族での外出時に車の運転をする
20 定職について仕事をする	46 旅行や遊びの計画を立てる
21 アイロンがけをする	47 虫を飼う
22 洗濯物を干したり取り込んだりする	48 家族を危険から守る
23 テレビゲームやロールプレイングゲームをする	49 日曜大工をする
24 風呂の掃除をする	50 家族の食事を作る
25 洗車をする	51 壊れたものを修理する
26 スポーツや趣味に出かける	

付け加えることとした。その結果、51項目からなる家族行動目録が作成され、全項目を研究2の調査に用いる質問項目とした(表1)。

研究2 家庭内における性役割尺度の構成

研究2では、研究1で収集された家族行動目録に基づいて、家庭内に存在する性役割を測定する尺度を構成することを目的とした。

方法

〈調査協力者〉

調査協力者は大学生180名であった。性別の内訳は男性99名、女性81名であり、平均年齢は19.6歳であった。

〈調査方法〉

調査は、4年生大学の学部生を対象とした3つの講義において、講義開始直後もしくは終了直前の時間を利用して、集団一斉法で実施された。

〈質問項目〉

調査用紙は、調査目的と性別・年齢を記入する欄が設けられたフェイスシート1枚と、研究1の事前調査によって収集され、構成された家族行動目録51項目が書かれた質問紙3枚の計4枚で構成された。本研究では、家庭内における男女の役割を区別するための尺度を開発することが目的であったため、51項目に対して、「女性がすることだと思う」「どちらかといえば女性がすることだと思う」「どちらでもいいと思う」「どちらかといえば男性がすることだと思う」「男性がすることだと思う」の5段階で回答を求めた。

〈手続き〉

調査者は、調査に先立って、調査の趣旨と本調査が協力者の自由な意思の基に行われることを説明した。調査に協力していただけることを確認した上で、フェイスシートに性別

と年齢を記入させた。フェイスシートの記入が済んだことを確認した後、調査の内容を適切に理解してもらうために、調査者が次のように質問紙の趣旨を読み上げた。

「これから皆さんに覚えていただく用紙には、日常生活を送るにあたっての役割や行動が書いてあります。それらの役割や行動について、みなさんは男性または男の子、女性または女の子のどちらが行うことだと思いますか。当てはまるところに丸を付けてみてください。ただし、これは、みなさんが実際にそのような行動をしているかどうかや、どちらがふさわしいかを問うものではありません。それらの役割や行動に対するイメージを伺うものですので、あまり考えすぎずに率直に回答をしてください。」

その後、質問がないことを確認して、回答を開始させた。それ以降は、協力者各自のペースで質問紙に回答をさせた。回答中に質問等はなく、全員が回答し終わったことを確認して質問紙を回収した。調査に要した時間は、調査の説明から質問紙の回収まで約15分であった。

結果と考察

調査協力者180名のうち、男性2名が途中で回答を中止していたため、分析から除外した。そのため、分析には178名(男性97名、女性81名、平均年齢19.6歳)の回答を利用した。

〈因子の抽出〉

まず、性役割の認識の構造を検討するために、それぞれの質問項目に対する「女性がすることだと思う」「どちらかといえば女性がすることだと思う」「どちらでもいいと思う」「どちらかといえば男性がすることだと思う」「男性がすることだと思う」の5段階の回答に、それぞれ1から5の数字を割り当て

て得点化した。

有効回答者の全項目得点を用いて、主因子法バリマックス回転による因子分析を行った。その結果、第3因子から第4因子の間で固有値が大きく下がったので、3因子解が妥当であると判断した。因子分析を行うにあたり、因子負荷量が0.45以上の項目を、その因子を説明する項目として採用することとした。また、どの因子に対しても高い負荷量を持たない項目、あるいは複数の因子に対して因子負荷量の高い項目は、尺度構成に相応しくないとして除くこととした。それらの項目がなくなるまで、項目を減らしながら因子分析を繰り返した。その結果、3因子、23項目が残った。回転前3因子の累積寄与率は48.0%であった(表2)。なお、この分析には統計ソフト Excel 統計2006が用いられた。

次に、抽出された因子に因子名をつけた。

第1因子は、「洗濯物を干したり取り込んだりする」「玄関や部屋の掃除をする」「布団を干す」「アイロンがけをする」「子どもの身支度をする」などの行動で構成されていた。これらの行動には、一般的に祖母や母親が行う家事や母性を象徴する役割が集まっていると考えられた。このためこの因子を、「女性役割行動」因子と命名した。第2因子は、「家族を危険から守る」「日曜大工をする」「車や機械のメンテナンスをする」「電球の交換等、高い場所で作業する」「お金を稼ぐ」など、これまでの研究で男性に求められるとされてきた「強さ」「道具性」「経済力」に象徴される項目と考えられる項目で構成された。そこでこの因子を「男性役割行動」因子と命名した。

第3因子は、「おままごとをする」「人形遊びをする」「虫を飼う」「ミニ四駆や電車のお

表2 家庭内における性役割行動の因子分析結果

項目	内 容	因子1	因子2	因子3
第1因子 女性役割行動 ($\alpha = 0.84$)				
30	洗濯物を干したり取り込んだりする	0.752	-0.170	0.205
19	玄関や部屋の掃除をする	0.744	-0.186	0.157
11	布団を干す	0.720	-0.235	0.104
23	食事の後片付けをする	0.711	-0.145	0.012
44	トイレの掃除をする	0.681	-0.076	0.195
28	風呂の掃除をする	0.645	-0.017	-0.257
31	アイロンがけをする	0.642	-0.334	0.336
40	子どもの身支度をする	0.565	-0.313	0.335
12	ゴミ捨てに行く	0.559	-0.054	-0.322
14	日用品の買い物に行く	0.527	-0.351	0.117
第2因子 男性役割行動 ($\alpha = 0.71$)				
4	家族を危険から守る	-0.126	0.724	0.238
7	家族での外出時に車を運転する	-0.116	0.653	-0.178
42	お金を稼ぐ	-0.145	0.600	0.133
20	重い荷物を運んだり、移動したりする	-0.153	0.599	-0.265
3	日曜大工をする	-0.270	0.581	-0.265
37	車や機械のメンテナンスをする	-0.255	0.569	-0.345
17	電球の交換等、高い場所で作業をする	-0.103	0.559	-0.313
9	虫や害虫の駆除をする	-0.108	0.486	-0.131
第3因子 子どもの遊び ($\alpha = 0.68$)				
48	おままごとをする	0.175	-0.204	0.676
24	人形遊びをする	0.071	-0.166	0.656
16	なわとびであそぶ	-0.155	0.162	0.541
5	虫を飼う	-0.231	0.171	-0.502
33	ミニ四駆や電車のおもちゃで遊ぶ	-0.077	0.230	-0.600

もちゃで遊ぶ」「なわとびをする」はこどもの遊びと考えられるため、「子どもの遊び」因子と命名した。

「子どもの遊び」因子の中で、因子負荷量が正の項目である「おままごと」「人形遊びをする」は幼児期に女兒が行う遊びであると考えられ、これは出口等(1991)の研究に一致した。そのため、「おままごとをする」「人形遊び」は「子どもの遊び因子」の中でも、「女兒の遊び」と捉えることとした。因子負荷量が負の項目「虫を飼う」「ミニ四駆や電車のおもちゃで遊ぶ」は男の子がよくする遊びだと考えられるので、「子どもの遊び」因子の中でも、「男児の遊び」と捉えることとした。

「なわとびで遊ぶ」については、第3因子に対して正の因子負荷量を示した。しかし、男性評価者・女性評価者とも、上述の4種の遊び行動に対する回答分布とは違った傾向が示された(表3)。上述の4種の行動に対する性に相応しい遊びとしては、両性の評価者で一致した。「人形遊び」や「おままごと遊び」では8割以上が女兒の遊びとした。また「ミニ四駆や車で遊ぶ」は8割以上が男児の遊びとしたが、「虫を飼う」はそれ程男児に偏った回答とはならなかった。評価者のどちらの性でも男児の遊びとどちらでもよいとする回答が拮抗する数となり、積極的に女兒の遊びとする回答はほとんどなかった。これらに対して「なわとびで遊ぶ」では、どちらでもよ

いとする回答が、評価者の性別に関係なく8割を超えていた。したがって「なわとびで遊ぶ」は、どちらかの性の遊びに属させることはしないこととした。

以上の結果から、家庭における性役割行動を議論するときには、ここで示された3因子構造で考えていくことが妥当であると考えられた。

〈尺度構成：信頼性・妥当性の検討〉

家庭内の性役割行動認識尺度は、因子分析の結果から、3下位尺度で構成することとした。また、各下位尺度を構成する質問項目数を同数とするために、各因子で因子負荷量が高いものから5項目ずつを取り出して、各下位尺度を構成する項目とした。

各下位尺度の信頼性を検討するために、それら5項目でCronbachの信頼性係数 α を算出したところ、第1因子である「女性役割行動」尺度は $\alpha = 0.84$ 、第2因子である「男性役割行動」尺度は $\alpha = 0.71$ 、第3因子である「子供の遊び」尺度は $\alpha = 0.68$ であった。第1因子である「女性役割行動」尺度では十分な信頼性が得られた。一方で、第2因子である「男性役割行動」尺度、第3因子である「子どもの遊び」尺度については、やや低いものであった。しかし、尺度全体としての信頼性は十分であると考え、以上の15項目によって家庭内性役割行動尺度として構成することとした。

表3 子供時代の遊び行動に対する性役割認識の分布。(女性評価者および男性評価者の選択肢にある数字は、男児/女兒のすること、どちらもすることの回答を示した人数である。)

		どちらの性別の遊び？				
		人形遊び	おままごと	縄跳び	虫を飼う	ミニ4駆
女性 評価者 (81名)	女兒用	76	71	16	1	0
	どちらでも	5	10	65	32	11
	男児用	0	0	0	48	70
男性 評価者 (97名)	女兒用	81	76	10	0	0
	どちらでも	15	21	83	53	11
	男児用	1	0	4	44	76

次に、これらの尺度の妥当性を検討するために、下位尺度ごとに尺度得点を算出した。下位尺度得点には、各下位尺度を構成する5項目の得点の平均値を用いた。ただし、子供の遊び尺度では、前述のごとく、「縄跳びで遊ぶ」はどちらかの性に帰属させられないので、他の4項目で尺度得点を算出した。また、「おままごと」・「人形遊び」は正の因子負荷量、「ミニ4駆」・「虫飼い」は負の因子負荷量を示した。前2者と後2者は逆の方向を示す特徴を持つので、後2者の得点を逆転し、女兒の遊びの方からの得点として4項目の得点を平均し、子供（女兒）の遊び尺度得点とした。

その上で、各下位尺度が示す当該の性らしさを明らかにするために、各尺度得点で3より大きい尺度得点（男性役割評価）を示した人数、3（どちらでもよい）を示した人数、3より小さい尺度得点（女性役割評価）を示した人数を、評価者の性別に集計した（表4）。

その結果、これら3下位尺度の評価分布は、女性評価者と男性評価者で同じ傾向を示した。女性役割尺度では、圧倒的に女性役割と評価する人が多く、男性役割と評価する人は一桁であった。また逆に、男性役割尺度では、評価者のどちらの性別でも、ほとんどが男性役割と評価し、どちらでもない・女性役割と評価する人はほとんどいなかった。女兒遊び尺度でも同様に、評価者のどちらの性別でも、女性役割と評価する人がほとんどで、男性役割とする人は誰もいなかった。これらのこと

から、本尺度は日常に実感している家庭内で見られる性役割行動を測定する尺度として妥当であると考えられる。

女性役割尺度では、男性役割尺度とは若干異なる結果となった。女性評価者の84%が女性役割行動と認識しているのに対して、女性役割行動とした男性評価者は、62%であった。また、女性評価者では男性役割行動としたものは一人もいなかったが、男性評価者では6人いた。それに対して、男性役割尺度では、女性評価者、男性評価者のどちらも、男性の役割としたものが98%以上であった。女性役割行動が男性には女性に限ることはないとする柔軟な傾向がみられているのに対して、男性役割行動では、どちらの性にも男性の役割とする伝統的な考え方が根強く残っていることを表す数字であると思われる。

まとめ

性役割認識を測定する尺度（BSRI）で測定される女性役割、男性役割に対する認識に、性差がみられなかった（金・小川, 1999, 早瀬, 2008）。その原因に、これまで性役割を測定する尺度として頻繁に用いられてきた尺度が、公的領域において求められる性役割認識を測定しようとしたものであり、そのために性役割認識が急速に変化している現代では、適切に性役割認識を測定できなかったのではないかという疑問が生じた。一方で、私的場面では性役割期待が示される場面をよく

表4 男性役割尺度得点・女性役割尺度得点・女兒遊び尺度得点における男性役割・女性役割・女兒遊びと評価した評価者の女性評価者・男性評価者別人数。

	女性評価者 (81名)			男性評価者 (97名)		
	>3 (男性役割評価)	3 (どちらでもよい)	3< (女性役割評価)	>3 (男性役割評価)	3 (どちらでもよい)	3< (女性役割評価)
女性役割尺度	0	13	68	6	31	60
男性役割尺度	80	1	0	95	2	0
女兒遊び尺度	0	3	78	0	5	92

経験する。そして、理性的社会的行動を求められる公的場面に対して、情動的行動が現れやすい家庭や個人的交流のような私的領域における性役割期待では、性差がみられるのではないかと考えられた。しかし、私的領域における性役割期待を測定する尺度は見当たらない。そこで本研究では、家庭内でみられる性役割行動に基づく尺度を構成した。その結果、女性役割行動、男性役割行動、子供の遊びの3下位尺度15項目からなる家庭内性役割行動尺度が構成された。妥当性を検討したところ、評価者の性別にかかわらず、それぞれの尺度で対応する性別に相応しいとする回答が高率で示された。このことは、日常の家庭内でみられる性役割認識を測定する尺度として、本尺度は妥当性を十分に満たすものと考えられた。

引用文献

- 安達圭一郎・上地安昭・浅川潔司 (1985) 男性性・女性性・心理的両性性に関する研究 (I) — 日本版 BSRI 作成の試み — 堀洋道・山本真理子・松井豊 人間と社会を測る 心理尺度ファイル (1994) pp. 30-34.
- Bem, S. L. (1974) The treatment of psychological androgyny. *Journal of Consulting and Clinical Psychology*, 42 (2), 155-162.
- 出口貴嗣・柴田知己・佐藤陽彦 (1991) 幼児の生活行動の発達と性差—性役割の形成に注目して— 生理人類学研究会会誌, 10 (3), 171-182.
- 遠藤久美・橋本宰 (1998) 性役割同一性が青年期の自己実現に及ぼす影響について 教育心理学研究, 46 (1), 86-94.
- 早瀬未紗 (2008) 青年期における性役割の認知がストレス対処行動に与える影響 平成20年度岐阜大学教育学部卒業論文.
- 金 愛慶・小川俊樹 (1997) コーピング行動の性差—性役割の観点から— 筑波大学心理学研究, 19, 79-90.
- 児玉真樹子・杉本明子・松田文子 (2002) 現代の男女大学生の性格特性と性役割認知 広島大学心理学研究, 2, 73-84.
- ラザルス, R.S. & フォルクマン, S. (1984) *Stress, Appraisal, and Coping*. New York: Springer. (本宮寛・春木 豊・織田正美 (監訳) (2004). ストレスの心理学—認知的評価と対処の研究—実務教育出版.)
- 大井修三・今枝未紗 (2017) 社会的不適応と性役割期待 岐阜女子大学紀要, 第47号, 31-43.
- 宇井美代子 (2002) 女子大学生における男女平等を判断する基準—公的・私的・個人領域との関連から— 青年心理学研究, 14, 41-55.
- 山田礼子 (2002) 男女大学生に見られるジェンダー観の比較—家庭内でのジェンダー観形成過程に注目して— 社会科学, 69, 1-33.